【特別寄稿】

台湾と日本をめぐる「戦後」と「今」

李登輝・元台湾総統への対面取材記録

The Record of an Interview with the Former President of Taiwan, Denghui LI

台湾（中華民国）元総統・李　登輝
Li, Denghui / Ri, Touki
羽生浩一、「学生取材班」[1)]
HANYU, Koichi and the seminar students

キーワード：領土問題；台湾の民主化; 両岸関係; 日台交流

Received: 2021. 3. 22

はじめに

2021 年 3 月 5 日から開催された中華人民共和国（以下、中国）の「全国人民代表大会」では、李克強首相が台湾の独立を目指す動きを断固阻止すると改めて強調し、3 月 9 日の米国議会証言では、米インド太平洋軍のフィリップ・デービッドソン司令官が今後、6 年以内に中国が中華民国（以下、台湾）を奪取する可能性を指摘した。東アジアにおける台湾の在り方が今、かつてないほど大きく揺れている。中国側の圧力により国連加盟国のうち台湾と国交を結ぶ国は、現総統の蔡英文が就任した 2016 年 5 月からこの 5 年で当時の 22 カ国から 15 カ国へと減少し、7 カ国が中国と国交を結び直した。中国は着実に奪取への準備を進めている。台湾は冷戦時代から対中共戦略の要衝であり、米国や日本を中心とする西側諸国の意向に国の命運を委ねて来た。台中戦争の勃発は、日米を巻き込む大惨事となる。このように緊迫する台中関係の今、戦後の台湾と大陸の中国の「両岸関係」において毅然（きぜん）と中国に対峙（たいじ）し続けた台湾の重要な政治家であり、「台湾民主化の父」と称される李登輝元総統（1923-2020）について振り返ることは重要である。

李登輝元総統（以下、李元総統）は、日本統治時代に京都大学で学び、米国留学を経て台湾大学教授を務めたのちに、国民党政府の蒋経国に抜擢（ばってき）されて台北市長、そして蒋経国総統の死去に伴い中華民国副総統に昇格し、その後、台湾人で初めての総統に選出され、台湾の民主化の土台を築き上げた。世界的にもアジアの哲人と尊敬され、親日派として知られ、とりわけ日本では自民党を中心とした保守派の政治家たちから支持を得た人物でもある。本稿は 2013 年 2 月に行われた李元総統への対面取材記録（未公表）[2)]をひもとき、李元総統の発言記録として掲載し、公表するものである。

筆者と東海大学文学部広報メディア学科学生による李元総統への表敬訪問及び対面取材が行われたのは、2012 年 12 月 26 日に日本で第 2 次安倍晋三内閣が発足して 2 カ月後の時

期であった。第 1 次内閣時に病気により首相を辞任すると、一議員として安倍氏が台湾を訪れ、李元総統が尖閣諸島をめぐる問題に助言したという話を、この対面取材以前にも李元総統から伺っていたが、この対面取材後の 4 月に長年、膠着したままだった尖閣諸島をめぐる漁業権問題に、発足して間もない第 2 次安倍内閣が動いたのである。まさに歴史は人によって作られると、李元総統の存在と影響力の大きさを感じるものであった。

この対面取材は 2013 年 2 月 27 日（水、16:00～18:00）に台湾直轄市の新北市の財団法人李登輝基金會で行われた。対面取材は日本語で行われ、筆者および学生（7 人）が事前に準備した質問に則しつつ、追加の質問を差し挟みながら行った。当初は 1 時間の予定であったが、すべての学生からの質問に丁寧に答えたいとの李元総統のご厚意で、2 時間余りに渡った。李元総統が話される日本語は、戦前の台湾での日本語教育や京都大学生時代に培われ、関西弁訛りの混じった学生が話す言葉だと評されることもある。また発言中に「！（エクスクラメーションマーク）」で表記したところは、李元総統が力強く断言されたニュアンスを伝えるためであることをお断りしておきたい。語り手の人柄をそのまま伝えるため、語り口はなるべくそのままで表記し、読者の理解のために編集時に補足した部分は、両括弧「(　)」で付記した。

1. 尖閣諸島問題をめぐる今

（李登輝元総統から、引率の先生から質問をして下さい、と指名される）

羽生　：　まずは領土問題から質問させていただきます。尖閣諸島を含む沖縄をタックスヘイブン、またはスイスのような国際的な金融センターなどにして、容易に領土紛争を起こせない地域に出来ないだろうか、と思うのですが、総統はどのように考えられますか。

李登輝：　これは日本でもね、たくさんの政党がね。大阪の維新の会あたりもね、管理ね、共同管理という考え方を持っている。私ね、共同管理を持ち出すことは、日本にとって有利ではない。それは明らかに自分の領土を取り出して、それを共同管理してくれ、と言うことはね。面白いみたいな言い方ですけどね、これはね、あるべき態度ではない。結局、日本は立ってね、尖閣諸島の問題についてはね、ハッキリと尖閣諸島は日本の領土である！そして、日本はあくまでもアジアの平和状態の維持には努力します！（と断言すべきだ）。実はね、私に言わせると、何故、尖閣諸島の問題が起こったかと言うと、実はこれは中国がね、私の判断では、日本を試しているんですよ。というのはね、あの、600 年前の尖閣諸島は中国の領土だったとか、あるいは台湾の今の総統（馬英九：在位 2009～2014）曰く、1971 年から尖閣諸島は台湾のものだと言っているんですよ。全然歴史的な事実はない！これは私が言う。それは嘘だ、と。第 2 は国際法上においては、尖閣諸島は日本の領土であると決まっているんですよ。こういうことはハッキリしておかないといけない。台湾と日本の問題は何かというと、結局、台湾も昔は日本の一つの区域だった。そのとき尖閣諸島の、沖縄との台湾との関係は、国内の問題だっ

た。国内の問題で何があったかというと、尖閣諸島を中心とした漁場、魚取りね。魚はお互いに捕っていた。台湾が結局、100 年前からずっと尖閣諸島で、台湾の漁民が魚を捕っていた。同時に、沖縄の人間もそこ（尖閣諸島）で魚を捕っていた。日本統治時代にかつてこういうことがあった。つまりね、沖縄の漁民も、漁船も、漁場も。漁場の問題も尖閣諸島とは関係ないんですよ。尖閣諸島付近の漁場の問題。これを沖縄政府が当時の台北州政府に、委託した。こういうことは沖縄政府はやれないから。基隆にはね、沖縄の漁民がずっと住んでいるでしょう。そして漁船も来てるでしょう。（尖閣諸島の問題は）漁場と一緒に、この問題は沖縄では管理出来ないから、沖縄を中心とした漁場のことは、台北州政府に委託します、というのが元々の関係。でも、尖閣諸島に魚を捕りに行くのは当たり前みたいな。それが、第二次世界大戦があって、一時期はアメリカがコントロールしていたときは、ここ（尖閣諸島付近漁場）で魚が取れていた。ところが一旦、沖縄を日本に返還すると。佐藤（栄作）内閣の時代に返還したときには、ハッキリとこれは日本の領土、台湾は台湾という別の形になったから、ここに国としての関係が、今まであった関係が、無くなってしまった。

私が総統のとき（1988-2000）にね、一番気にしたのはこの問題でね。この問題を解決するには、漁場の問題だけを解決すればいいから、農林省の漁業局に頼み込んでね、台湾の漁民に、魚が捕れるようにやらせたらどうかと。というのはね、漁場の問題と言うのは、水の問題と同じく、これは一般的に言ってね、慣習法なんですよ。慣習に基づいて。普通の、絶対的な法律と違ったものであって、習慣的に。例えば、一つの水利。河が流れる各場所に水源がある。この水源というのは、もう慣習法によって決められている。漁場も大体そういう形です。私のときは、大抵、外国との漁場関係はほとんど協定を結んで来た。例えば、台湾の人民、漁民はね、えー、なんですか、イカだとかスルメだとかね。こういうのをどこまで捕りに行くかというと、ブラジルとかアルゼンチンとかね。そういう場合は、その国との間に漁業協定を作る。まあ、そういう形で。今、いわゆるその、どこだっけ、日本の植民地だった南洋で、漁業権をお金払って買っていた。そういう漁業協定。あそこは昔、中村（國雄）総統（大統領）というのがいた。そう、パラオですよ。ああいう形でずっと世界でやってきた。だから、日本に対しても、漁業協定やりましょう、という話を持ち出した。それが今、18 回目ですか？　漁業協定がなかなか結ばないの。というのはね、今まで中国とね、今までの日本の対中国政策がおかしいんですよ。中国人見ると、ペコペコ頭ばかり下げてる。ああいう考え方じゃ、日本とは何か？ということがハッキリしなくなってしまう。だから、台湾との漁業協定にはね、なかなか応じてくれないのよ。

日本の外務省辺りはね、私が日本に行く際にね、ビザを出してくれない。ああいう状態だったからね、昔は。ああいう状態のなかで、実を言うと、台湾の人が、結局、あんたも司馬遼太郎さんの、あれ（「司馬遼太郎が見たアジア」『文藝春秋』2013 年 3 月号）、読んだでしょう？　最近出た文藝春秋の。あれを見てると、あ

んた、ハッキリ司馬遼太郎さんが言うようにね、台湾というのは中国とは全然違うところである。そして、ここに日本との関係というのはね、日本が長い間、ネグレクトしてきた。あの、ネグレクト…軽視して、大事にしてこなかった。それが、司馬遼太郎さんの台湾紀行（『街道をゆく 40　台湾紀行』朝日文庫）が出てね、初めて、ははあ、そうか、と日本の人も気がつき始めた。そこらへんで日本と台湾の関係が非常に密接になって来た。だから、東北、岩手大地震のときも、世界で一番、これを気にしているのは台湾の人々でしょう。だから、こういう状態、日本の人々はハッキリしてなかった。今までの政治というのは、何をやって来たか。私に言わせると、問題が多い。個々に新しい政権が出て来た。ここに日本にはこういうことをやるには、リーダーシップというものが非常に大事だ。野田（佳彦）総理に、指導者としての力を発揮しろ、と言う。『正論』に出ているでしょう？　見ましたでしょう？　書いているように、日本にはね、私はいつも言っているんだけど、日本人の持つ、良い気質だとか品格というのは、世界中どこにもないんですよ。日本人特別の文化を日本人は持っている。何故、日本文化を自分たちが知らないのか。この日本文化はね、今回の地震でハッキリわかった、世界中の人はびっくりしているでしょう。あれだけの地震でね、日本の人民は秩序良く、全員がお互いに国を庇（かばい）合い、大事にしながら、奪い合いするとかそういうこともなく、やってきたでしょう？　国際的に見て、こんなような、日本人ってね、他にいないですよ。こうやって規則を守り、いわゆるその、国のことを頭の中に入れて、国を大事にする。日本文化のこの高さ。私のこの本にも書いてあるでしょう。日本文化というのは、世界に無いものが有るんですよ。だから、今日はいわゆるその、power of memory（記憶の力）。日本人というのは、こういうものを持っているんだよ。こういうのを忘れてはいけないんだよ。こういう伝統とこの文化。それが日本のもの。

それがハッキリするようになったのは、最近。安倍（晋三）さんがハッキリ言った。尖閣諸島は日本のもの。アジアの平和のために、中国は変なことをしないでくれ。同じイシューの話をしよう、と。それから後、中国から飛行機も船も出なくなったでしょう？　そうでしょう？　見てないでしょう？　それより前は平気でね、飛行機からあの、いわゆるその監視船、乗らせてね、色々なことをやって暴れているでしょう。そういうようなこと（抑えるには）はね、いつになっても、リーダーシップなんだ。この為替率を下げる（円安誘導）こと自体がね、各国との関係もあるから、リーダーシップが無ければならない。このリーダーシップに関する問題については、私が 2003 年にね、今日は持って来てないか…。2003 年にね、例のブルーム（バーグ）ニュースね、ブルーム（バーグ）ニュースに私、書いておりますよ。日本はアジアの指導者にならなくてはならない、とね。私、そういうことを書いております。ちょっと待ってね……これは、私なりの理論があるんですよね。経済学的に見てもね、こういう日本が円安政策をやらなくてはならないことはね。私は、そうか、ここに書いてないな、出てない。ブルーム（バ

ーグ）ニュースってご存知でしょう？　アメリカのね、あの中に出て来た、デフレの政策問題でね、31 人の理論が入っているでしょう。その中に私も入っているでしょう。私はね、日本はアジアの指導者になるように、努力しろという論文でね。あのね、あの時は 2003 年だから、（1 ドルあたり）150 円ぐらいにね、下げろと言ったんだよ。それは少し酷（ひど）すぎるけどね、今じゃ結局、私は 100 円ぐらい、100 円ぐらいに落としていく。これが結局、日本をこの困難の中から、抜け出す唯一の方法なんだ。抜け出す方法は何か、というのは皆さん、あまり日本の学者もたくさんおりますけど、この問題は、今言った尖閣諸島の問題と絡んで、日本には、リーダーシップが欠如している。リーダーシップが欠如しているのは何故か、というと、結局、総理は誰のために総理になったか、分からない。私、言っているでしょう？党のために出て来たんであって、国民と国という問題が頭に入っていない。そうでしょう？　私が菅（直人）総理を非常に批判した文章たくさん出ているでしょう？　飛行機に乗って、ヘリコプターに乗って、苦しんでいる人民を、被災地の人民を上から見ている。ああいうような人は国の総理じゃないのよ。観客ですよ、観光客ですよ。国の総理ならば、村から村まで歩いて、そして人民の必要な、どの家も訪れて、何に困っている、どこに問題がある、と言わせるのよ。そしてそれをすぐ解決してやる。それが総理なんだよ。彼は何故、そういうことをやらなかったのか。人民が選ばなかったから。

羽生　：　もし、総統が日本の首相だったら、尖閣諸島問題をどう扱われますか？

李登輝：　何も考える必要は無い。私がさっき言ったように、中国は現在のところ、こういうような（尖閣諸島に飛行機や船を出す）ことをやって、本当にね、今ね、正直言うとね、中国はアメリカが怖いのよ。軍事的な面から見てもね、アメリカと直接、衝突するようなことがないように、考えている。それはね、主権問題を口にしてもね。何故、飛行機や監視船を出してね、こうやるかというと。日本は一体、どれだけ自分の国の管理をやっているか。あんたの領土のところを、どれだけ力を入れて管理しているか。この問題なのよ。試しているんだよ。（それを）日本は分からないんだよ。試されているのに、それをああ、そうか。捕まえたらすぐ返してやるとかね、漁船の船長をね、何とかこんなことやったりしてね、これじゃ甘過ぎますよねぇ、実を言うと。こういう考え方でね、結局、中国は日本を今、試しているのよ。尖閣諸島は日本の領土。一体、日本は自分の領土である尖閣諸島をどれだけ上手く管理しているかを。これをアメリカに見せるのよ。日本は我々が（管理を）やるんだと。だから、あんたが言った考え（尖閣諸島を含む沖縄をタックスヘイブンにする）が出てくるのよ。自分の国（の領土）を共同管理させる。私、そういうことは…。

羽生　：　繰り返しになりますが、共同管理ではなく、日本が沖縄に経済特区のような形で国際的な金融センターを置くことで、紛争回避などの布石になるのでは？

李登輝：　今は一国二制度を唱える時代ではない。今の国際状態を見なくてはいけない。今の国際状態は結局、指導者の国、城がいない状態ですよ。アメリカの覇権はす

でに無くなっている。世界はね、結局、自分の国は自分で守らなくてはいけない。と、同時に、国際的な平和というものを維持すると。だから、例えば、G ゼロ（ジーゼロ、グラウンド・ゼロ）の本を読まれたでしょう？　日本、出ているでしょう。そうじゃないよ。アメリカの、あの、何ていうやつだ…あの、イアン・ブレマーが書いた『「G ゼロ」後の世界』という本がある。日本で翻訳されている。日本経済新聞社から出ている。その本を読んでいたら、一番分かる。彼は、ハッキリね、アメリカと日本は、アメリカと中国は、非常に危ない。今の状態。中国はね、やりだすとね、大変な状態になりますから。というのはね、アメリカはね、あなた方はもう少し、アメリカのね、中国研究を見なくちゃいけないな。あるでしょう？　あれ、何新聞だ？　1 年間連続して書いたやつ。なんだ、構わない。アメリカのね、アメリカに対する研究、アメリカの中国研究、やらなきゃならない。知らなくちゃならない。あなた方も本当に、中国という国をよく知らなくちゃいけない。ハッキリと、司馬遼太郎さんの台湾紀行の中に、私が書いた。中国という社会というのは、私（わたくし）個人の利益しか考えない国。ね。今日の今朝のテレビにも出とった。日本人が台湾に来て、そしてここで店を開いて、中国に対して貿易やると。こういうことを言っていた。中国人は私人の利益を中心に考えるから。日本人は全体的な形で物事を考えている。だから、家を借りるにしてもね、どうやっていくか、ということを考えると。こういうのが今朝のテレビにもちょっと出とった。そういうようにして、中国というのは何か、というのを日本人は案外分かっていない。我々みたいには。

私は 22 歳まで日本籍だった。それから後は台湾籍になって。そうやって、それから後は中国社会に潜り込んで。今、92 歳。だから、70 年間、国内の生活で、中国というのを色々な人が色々なこと書いていますよ。日本が中国関係とか、論語とかね。いろんなことを説明した、書いている学者はいっぱいいますけど、本当に中国人の生活を知っている人はいないのよ。少ないのよ。あっても、おそらく利益関係があって、そこで話をしている。そこら辺をハッキリさせないといけない。まあ、日本は孤立するようなことは言うべきではない。日本自体の考え方。だから今回、例えば、安倍さんね、ベトナムへ行ったり、タイ国へ行ったり、インドネシアを回って来た。同時に、オーストラリアにもフィリピンにも、シンガポールにもね…。そういうあれを見とったらね、あなた方ね、もう少しね、中国というのを知らないといけない。

まあ、中国、現在の例えばね、あなた方今、知らなきゃいけないのはね、北京コンセンサスという問題と、ワシントン・コンセンサスという問題。これを知っておかなくちゃいけない。結局、アメリカ、ワシントン・コンセンサスは結局、経済発展の方向だな。北京コンセンサスといっても、特別なものではない。それはね、やはりね、かなり日本的なね、経済発展の方向を取っているだけ。条件が違うのよ。労働者が多いから。じゃんじゃん労働者を使って、外国の資本と技術を利用して、それで経済を伸ばして来ている。本当に。これは米国の中国研究を

ね、これは、ちょっと難しいけどね。古森（義久）さん、私の良い友達。彼のこの研究と、最近また出たのがあるんですよ。最近ね、そうそう。『Voice』（PHP 研究所）に一つ出ている。『Voice』にね、彼の論文が一つ出ている[3)]。今月号かなあ、2 月号かな。それにやっぱり出ていますよ。だから、尖閣諸島の問題はね、これ位にして。というのはね、尖閣諸島の問題はね、もうあの安倍総理のこの宣言でね、黙っている。これ以上、中国は手を出せなくなった。その代わりに、この 2 月に、いわゆるその、安倍さんがアメリカ訪問というね、非常に意義が大きいのよ。何故行ったかは分からない。ところが、日米同盟、日米安保条約のね、再強化の問題とアジアにおける平和の問題と、色々な種類の問題はある。「日本はアメリカに代わって、やります」というある程度のことをやればね、完全に中国は何も言えなくなってしまう。こういうことを知らないでね、それに最近はロシアにも代表を出して、お話をしている。もう中国は囲まれてしまっている。それがアメリカを中心にして。オーストラリアもそうでしょう？そういう状態を見ていると、私は、日本は今、新しい方向に向いている。この新しい方向に、今までのこのようなことはもう、尖閣諸島は何も問題が起こるはずが無い。飛行機でも出すとかね、いわゆる無線、あの、で、なんだ。いわゆる特殊な何か方法で、船とか色々なものに攻撃的な、レーダーでやってもね、出来なくなるでしょう、そういうこと。だからね、安倍総理が上がった途端に黙ってしまった。静かになっちゃった。そうでしょう？　そこらへんはやっぱり距離を置いてやっている。領海に入り切らない。

羽生　：　総統がもし、安倍首相の立場であったら、中国に対して強く牽制しますか？

李登輝：　やりますよ、私。私はね、1996 年に総統選挙やるときに、中国からミサイル打って来た。台湾に。私はね、化学のミサイルをまだ打つな、と。あんた、ただミサイルを打ってくるだけの実力が無い。あれが入っている。いわゆる爆薬が入っていない。弾頭にマシーンを入れている。そんなもの、私少しも気にしておりませんよ。私は、十八番のシナリオを持って、相対しておりますから。と罵ってやったら、黙ってしまった。アメリカの方で、航空母艦を派遣して来た。2 隻ね。そうしたら（中国は）黙ってしまった。結局、あの国はね、力で人を脅かすけどね、力に押されてしまったら何も出来なくなってしまうのよ。黙ってしまうのよ。中国人というのはね、まず脅かしますよ。ここに書いてある。そうそう。中国を恐れるな。

私は 22 歳まで日本人でした。そして今、92 歳。この間の体験から、中国人というものをよく知っております。彼らはまず第一に嘘をつく。第二に大きいことを言って脅かします。これに引っかかってはいけません。これを真似（まね）て、最近ではコリア（韓国）まで日本を脅かすような振る舞いが目立っています。台湾とコリアは何が違うか。台湾は日本と心と心の絆を結んできました。日本と台湾と結ぶのは日本精神です。おかしいけどね、それがこれに出ている。先日、日本の国会議員が来て言うには、尊敬する政治家は吉田茂と、岸信介、そして李登輝であ

る。何故かと言うと、勇気がある。しかし、そういう李登輝の人格と教養の基礎を作れたのは日本時代の教育だったのです。特に私は明治維新の基礎を作った坂本龍馬と、大政奉還を、（江戸城）無血開城を完成した勝海舟。そして、民政長官として台湾の近代化の基礎を築いた後藤新平に学んだことは大きい。「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう」の自治の三訣に表れた後藤新平の精神には、龍馬の政治改革には、はつらつとした明治開化の息吹を台湾に吹き込んでくれました。そして、辛抱強く、台湾の人々を強化していったのです。

今、台湾も日本も、坂本龍馬、後藤新平のような、はつらつとした精神を必要としているのではないでしょうか。「心事の棚卸し」とは、日本精神を取り戻せということであり、その日本精神に基づいたリーダーシップを持て、ということです。心事の棚卸しというのは、いわゆる福沢諭吉の『学問のすゝめ』の第 14 編に出とったやつでね、それを読んどったら、心事の棚卸し。政治のリーダーシップと日本精神。これ、非常に大切なことですよ。これが今ね、即日発揮している。

2. 第 2 次安倍内閣の課題

李登輝：　私は非常にね、例えば、安倍新政権。どういう方向に進んで行くか大体、分かる。非常に気にしておりましてね。非常に今まで見て来てね、非常に良いと思います。これでいいんだよ。まずね、為替率を下げる。経済の安定。そして、いわゆる雇用の増加。それに伴う失業の救済。

インフレーションは 2%位にしてね、ある程度利息を上げて、リタイアした人間の退職金とかいろんな、そのいわゆる救済金の銀行で利息を払えるようにしてあげる。生活が非常に良くなってくる。こういうことをやると外国に迷惑じゃないかというのは、構わない。これをやっていると、外国からの日本への移民は増えます。これで補うことが出来ると言うのです。なぜこういうことをやらざるを得ないか、というと、22 年間のデフレの中で結局、経済学者にしてもね、これは景気循環の問題だといって、日本は経済が良くなると考えている。そんなのはウソでしょう。20 何年間も景気循環なんてないんですよ。20 数年間、見えざる手による市場で調整が出来ないんですね。ことに日本銀行なんておかしいんですよ。白川（方明）総裁がね、考え方がおかしいんだよ、大体。何考えてる。金持ちのために日本円が高くなれば金持ちはいいでしょう。一般の人間は可哀想でしょう。

私が書いた論文を読んだと思いますがね、今、日本は非常に疲れている。20 何年間もこんな状態の中にいて、さらに消費税を課すというのは何でしょうね。消費税を課して何が出来るかと、きついことを書いたんですよ。覚えてると思いますが。こういう中において、日本は思い切って為替率を下げる。いま、おそらく、これに賛成する人が大部分になってきた。最近の状態を見ていると。この政策が出たときは新聞とかで批判がいっぱい出てるんですよ。こういう批判にね私、こ

う言っていますよ。(2012 年) 12 月 16 日の衆議院総選挙は自民党と公明党の圧勝に終わりました。国家の崖、ナショナルクリフ、アメリカではホネンシャルクリフ、という土壇場の危機に迫られていた日本に、最後の再生のチャンスが与えられたと言えるでしょう。とはいえ、前途は難題の山です。

圧勝にもかかわらず当日、安倍氏の顔に笑顔がほとんど見られなかったところに、安倍新政権の課題の重大さが表われています。ここでまず指摘すべきは、自民党は決して大勝などしていないということです。小選挙区で 8 割の議席獲得はたしかに大勝利ですが、これはまさに小選挙区性特有のマジックで、得票率自体は 43%しかありません。それが 3 分の 2 の票を取る。おかしいでしょうね。比例区に至っては前回の得票率が増えたのはたったの 1%。27.6%が実際の得票率です。次の参議院選の参考になるのはもちろん、これで戦いにも勝てると思ったら笑われることになるでしょう。要はこれから自民党がいかに支持率を上げていけるかが鍵なのです。これが問題なのです。

それとね、参議院の選挙が 7 月にある。これまでどうすべきかという問題ですね。ここで私が言うのはね、安倍さんは謙虚にやることだね。党の中に、いわゆる新しい人間がたくさん入ってきた。こういう人たちに頭をすこし下げるべきだな。謙虚。謙虚さを持って向かっていく。ところが冷静に決まったことはきちんとやる。今までの総理はああいう気持ちが無いんだよ。しかしながら、選挙で必ずと言って良いほど振り戻しがありますね。今回、自民党が勝って、また選挙が過ぎたあと国民が思うのは、かなりの確率で反対の行動に出るということです。ここで一番大事なのは何かというと、安定的な長期政権を作らなくてはいけない。安定的な長期政権を作るにはまず、参議院の選挙では大多数の議席を取らなきゃいけない。これによって初めて憲法改正からいろんなことが行われる。でないと憲法改正なんて大きな問題は参議院がイエスと言わなければ中々出来るものではない。

メディアは今回の選挙で民主党から自民党へ変わるのがいいのかという対策に舵を向けました。日本のメディアもおかしいですよ。嫌なことを言ったり、言わないと済まないことが多いんでしょうね。そうしたことに気を取られない。総理はそういうものに気を取られないこと。昔はね、前の菅（直人）総理みたいにね、口だけ一所懸命上手いこと言いますよ。彼も結局、口達者で通ってきた人間だから。いざという時はダメなんだ。日本人はああいうのじゃないんだ。日本人というのは言ったら必ず実行する。それが日本人の精神の一番基本的な問題。それが、私が言う武士道の精神だよ。これが無ければ我々、子供の時、学校で教えられたのが何かというと、言ったら必ず実行する。実行する気が無ければ言わないこと。こういうのを今忘れられてしまっている。本当なんだ。日本人が他の国と違うのは何かというと、言ったら必ず実行する。実行するというのは何かというと、国のために、公のためにやらない。これが日本の精神だよ。日本人精神。この（本の）中にも私、日本人の精神のことについて書いていますけどね。皆さんから質

問をね。どうぞ。

村山　：　4年の村山裕紀と言います。質問ですが、私は東日本大震災の被災地である福島県の出身なんですが、現在も原子力発電所事故の影響で福島県は苦しんでいます。そんな時に日本という国は被災地に対して何をすべきなのかということ。そして僕たち国民は自分の故郷のために何が出来るのかということを李登輝さんに教えていただきたいと思います。

李登輝：　あんたは福島県出身？そうか。ご苦労さんね、福島の原発の問題はまだ大きなものとしてあるからね。今の日本には結局安倍総理に対してやってもらいたいことは、20 兆以上の公共投資をやると言ったけど、これは優先的に災害地域に使うべきだと思いますよ。大臣は新しい法律を作る必要があるでしょうね。災害地域は日本の 5 分の 1 を占めているでしょう？この地域に対して特別法を作らなきゃいけない。特別法というのは何かというと、建築法の問題、土地の問題、そして津波に対する土手の問題、技術的な問題を、まず第一にやるべきじゃないか。この東日本大震災の復興にお金を使うべきでしょうね。

実は日本が 20 兆円も使うことに反対する人もいるかもしれませんが、アメリカに対して 70 兆円のお金を貸しているんですよ。その 70 兆円のお金を、実は政府がいわゆる債権を持って日本銀行が売ったら良いんですよ。そしたら政府は 20 兆円を使おうが 70 兆円の負担が無くなるから良いんですよ。ところが政府が赤字になっている。日本銀行は思い切って政府を手助けして、70 兆円を助けてあげたら、負債っていうのはいわゆる、もうこれ以上どうにもならないでしょうからね。20 兆円なんて小さなお金になってしまうからね。

羽生　：　中々、アメリカがウンと言わないんじゃないでしょうか。

李登輝：　アメリカに話したら良いんですよ。70 兆円のお金を貸して上げてるんだから。日本は再建中なんだから、日本銀行は責任を持ってやるべきですよ。貸してあげた人は自由に処理していく。そして日本としてどうあるべきか、日本の経済のことはアメリカの大部分の有名な学者は同意してますよ。いずれにしても結局、これに対してはアメリカではただ一人反対してる、ロジャーズ（米国の投資家、ジム・ロジャース）が。というのは、彼は株をやっているからね。彼は株をやってかなり金を持っているからね。こういう人たちは個人的な利益しか考えていないんです。そういうのはどうでも良いんですよ。日本はこのことをやるって、反対しているアメリカに今回安倍総理は言った。アメリカはこの問題に対しては何にも言う気がない。なぜか、アメリカもそうやっているから。そうでしょ。アメリカも、いわゆる G3（日・米・EU）では、お金を印刷してるでしょ。こういうことを考えれば何も恐れることはない。日本はその点において、こういうことを外交でやっていく人がいないんですよね。

羽生　：　恐れすぎているのでしょうか。中国に対しても、アメリカに対しても。

李登輝：　そうですよ。そこらへんハッキリ言うんだよ。もう小さくなってね。それはなぜかというと戦争に負けたからですね。負けたから怖くなっちゃってる。戦争に

負けたのは前の政府の話でいまの政府とは関係ない。今は今だよ。これ位考え方で考えなくちゃいけないんだよ。そこらへんで日本人の精神的な問題はこういうところに考えなきゃいけない。だから福島県の海岸地帯の復興だとかね、そんなものは実は安倍総理のいわゆる特別なものですよ。

私が書いているように、本当は緊急命令を 3 月 11 日（に発令して）、人間の生命とかそんな処理は、私だったら 4 日間で完成する。5 日目からは新しい法令を地域ごとに出すよ。復興政策をやって特殊命令を出す。これを日本はやらないなんておかしいんですよ。いくら民主主義の国でもこれは総理の考え方一つで、人民は OK というはずですよ。そうするとこの新しい法令で今度からの、いわゆる建築の設計は地震に弱いんですよ。台湾も同じですが地震が来たらめちゃくちゃになってしまう。地震が来ても困らないようにしなくてはいけません。いろんな新しい建築法で作り上げていくという考えを持ってやらなければいけない。そういうようなことで、福島県は苦労が多かったけどね。

原発の問題はもう少し時間をおいて考えなきゃいけないんですよね。今の原子発発電所はウラニウムを使うからいけないんですよ。ウラニウムを使わない原子力発電をやれるはずだよ。トリウムを使ったら良いんです。トリウムを。そしたら日本にはこういうことを研究して、出来るでしょうね。トリウムなら安全ですよ。ウラニウムは高いでしょう、トリウムなら安いし。

次は、いわゆるその、水素を利用するんだよ。自ら水素を取って利用すれば良いんだよ。水素による発電。これはね、水素は爆発しやすいからね。水素を完全に爆発しないような形にして水素を直接発電に使うと。もう一つは水素を利用していわゆる核の融合をやる。これは日本にちゃんと学者がいるし、出来るはずでしょう。核融合。これはアメリカでもすぐ出来る。日本は遠慮してるんだよ。というのも日本は今の発電所も GE の方式だからね。もうアメリカに頭を下げないといけない。そういうことは必要ないですよ。アメリカもスリーマイルの事故以降は火力発電に切り替えてしまっているでしょう。火力発電所に切り替えても原料が石炭だから日本には十分に無い。だから将来はトリウムの問題と同時に、水素による融合、この方向で、あるいは水素を使って直接的にやっていく。こういう研究が日本は出来ているんですよ。こういう面は私もこのような本を読んでいるからわかっております。福島県は可哀想ですよ。20 キロ、近づいてはいけないからね、そういう人たちの問題は解決してあげなくちゃいけない。こういうのは人民の生活が一番大切ですからね。

廣瀬　：　先ほどお話があったように、今の日本はリーダーシップを取る人材がいないということを阿川佐和子さんとの対談でも仰っていたと思いますが、リーダーシップに必要な要素は何だとお思いですか。

李登輝：　私、『最高指導者の条件』（PHP 研究所）っていう本を書いています。読みましたか？私は指導者の条件として 5 つ挙げています。まず強い信仰を持ちなさい。第 2 は権力をいつでも放棄しなさい。権力とは何か、権力というのは私のもので

はなく人民全部のものなんです。人民に代わってやっているのであり、必要な時に権力を使うということなんです。必要のないときは、権力は返す。権力をいつでも放棄しなさいという考え方。これは少し難しいことを言っているけれどね、そして第3は公と私は区別しなさい。そして苦しいことを進んでやりなさい。そしてカリスマ的なことはせずに人民に対しては誠実な気持ちで相対し、本当のことを言いなさい。

私は12年間の総統をやって、中国（中華民国）の政治体制を民衆的な自由的な形に血を流さずに切り替えていけたのは、結局は、私は信仰を持っていたことですね。この信仰はいろんなものを持っているんですね。さらに私はいろんな組織を持っている。ところが私の一番大事なモノは何かというとね結局、自分の心なんですよ。私、クリスチャンだからね、簡単にいえば、我々はいつも謙虚でなくてはいけない。謙虚でそして冷静に。そして苦しいことがあったらお祈りして、バイブル見て、聖書で何を与えられたか。バイブルの言葉を読むんです。そして我々の知識がなきゃならないんです。この本は少し遠い話みたいだけど、やっぱり人間として自分は何をすべきかということが一番大事なんですね。国のため、人民のために自分が何をすべきかという考え方は、普段から修行するんです。今からいろんなことで修行して痛めつける。そして謙虚な人間を自分で作り上げなくてはいけない。これにいろんな難しいことがあるけれど困らないし、慌てないでしょうね。こういうようなことが出来るでしょうね。この本はね、読んで下さいね。

西村　：　先ほども李登輝先生が仰っていたんですが、権力を放棄するという考え方についてお聞きします。権力が人民の声を潰（つぶ）してしまうことに対して、どのように対処すべきですか。

李登輝：　人民の声を聞いて、これは合理的かどうか、人民全体のために良いことなのか、あるいは何人かの人のための利益なのか。判断すべきです。これが多くの人民の声だというのがあれば、我々は同情をもたなくてはならない。ことに現在の社会はいわゆる貧富の差が非常に強くなってきた。貧しい人々の、生活の問題とか、いろんな問題、環境保護とかね、こういうようなことが今非常に一般的になってきた。人民はこれを要求する。これは飲み込んで了解しなくてはいけない。環境問題に関する今の要求というのは普遍的だ。このような問題に対しては、日本は非常に重視している人が多いと思うんですね。だから合理的にやれる。ところがね、人間というのは科学的に合理的であるとか、普遍的な性質にあるというのだけでは足らないんですよね。

人間のどんな人も心の中でいろんなことを考えているんだよ。で、こういう人達は何が困っているかということを知ってあげなくちゃならない。これが芸術だとかね、宗教だとかね、こんなものが入ってくる。こういうことに対して耳を傾けてね、聞いてあげる。何が違うかというとね、私の家にね、一人孫がおる。あんた方位の…より少し年だけど。彼は飯の時には絶対ね、フカのヒレを食べない

のよ。どうしてか？なんで食べないのかと。それと、あの、日本語でいったら…あれ何だ？

早川友久（李登輝元総統の秘書。以下、秘書）：　アワビ。

李登輝：　アワビ、絶対食べない。どうしてかというと、環境保護、こういう考え方があるのよ。で、こういうのはね、いっぱいしてあげるべきね。こういう考え、この考え方を生活の中に織り込んでしまっている。…で、こういうような時には彼には彼らの、これだけの権利を持っている。我々なんか「あ、良いよ、うん。食べな、食べないでも良い」と。だからお野菜…お野菜ばかり食べてる。アワビ、あんな高いもの食べないしね。それじゃあフカのヒレなんか食べまい、とかね。その代わりに一所懸命、犬をかわいがってやってると。ああいうような生活やってるのよ今、若い人は。私それ、了解出来ますよ。ね、だからこういうようなことは非常に多いのよ、地方的に。

例えば今ね、台湾には今、大きな問題というのは、この環境問題としては焼却炉の問題。作る、反対する、ね。焼却炉の問題。作らなければ、ごみの処理が出来ない。反対する人は出てくる。煙が出て良くないって。こういうことがね、なんで処理してあげるかというと、作る場所を選ぶとかね、場所の選択だとか、どこでやったら、全部に迷惑かけないとかね。こういうことを考えてあげる必要があるね。

羽生　：　総統がかつて台北市長時代に、台北のごみ問題に取り組まれて、その時に作ったシステムによって台北はごみの問題が改善されたと、お書きになっていましたが、その時のご経験も？

李登輝：　あの時はね、台北市に 3 つの焼却炉を作ったのよ。

羽生　：　どんな問題がありましたか。

李登輝：　その焼却炉の場所をね、選定が非常に大事だった。出来るだけ、焼却炉から出るいろんな煙の問題が他の地域にね、広がらないような方法だとかね、こんなことを考えとった…。

羽生　：　近隣住民の迷惑にならないようにだとか…。

李登輝：　そうそうそう、そういうような形で。今…何箇所か？3 箇所やっぱり残ってますよ。一つは少し山の方に作って。だからあの…町の方には煙が来ないようにね。第 2 はあんた方こっちに来る前に（見たかもしれないけれど）、あの…向こうの畑の中に大きな建物がある。あれ、焼却炉なのよ。あの焼却炉はね、あの 10 階位のところにね、食堂がある。ははっ。

羽生　：　焼却炉に食堂を作って展望台になっている？

李登輝：　そうそうそう、焼却炉が展望台になってね。ああいうようなことをやってね、そしてこれを（市民の声を）固めるとね、ま、こういう形でね、私はね、台北市長の時はね、市政というものを考えなかった。都市の行政ではなくて、都市の経営！だから、都市経営理論というものを作ったのよ！都市の経営は結局、何が原則かと。そして、どういう技術が欲しいかと。こういうことを決めて、そして…

例えば台北市あたりはね、おそらく台湾で初めてコンピューター導入したのよ。台湾の政府でコンピューター持ってたのは、あの時は市政が初めてだよ。だから、仕事が迅速に出来る、ね。

例えば、戸籍謄本。戸籍の処理の。私の場合はね、即座に処理出来るように。例えばあの時一番困ったのは私の前はね、自動車の免許場。自動車の手続きね。まあ、長ったらしいのよ。私わざわざ見に行ってね、おかしいのよ、第一やり方が。窓口、一つしかないのよ。私の場合は 5 つか 6 つ位作ってね、困らないようにしたんだ。あの時、みんな待たないといけなくて、時間が惜しいから、こういう仕事やってあげる人がおって、55 元位上げたらやってくれる（代行してくれる）という状態だったのよ。私、5 つか 6 つ位作ったら、もう、持ってったらすぐ（免許が）取れるから。もうああいうところで中間業者に頼らなくて良くなってね。こういう所から出発したんですよ。都市経営とはこういう問題だった。都市経営としてこういうことをやりはじめたんですよ、ね。それで、あの、一番うるさいのが戸籍謄本の処理の問題からね、自動車の免許場から、あの…ライセンスの問題から。こんなのもう即座に取れるような形を作ってあげなきゃいけないのよ。まあ、こんなかたちで処理してやってきたのよ。次はこっちの方から、藤井さん。

3. 台湾が築いた民主化への道筋

藤井　：　はじめまして。東海大学 2 年の藤井と申します。李登輝先生の、総統就任前の台湾の状況は、台湾のこれからを考える上で台湾の民主化が大切だと、その時の総統の蒋経国さんがおっしゃられました。

李登輝：　そうそう。

藤井　：　李登輝先生が台湾人の初めての総統ですが、総統になったからと言って、簡単にその時の状況は変えられるものではなかったのではないか、と私は考えております。しかし、蒋経国さんが出来なかったその台湾の民主化を進めるということを李登輝先生がやってのけたと、僕は思っています。その改革がもし、少しでも失敗すれば、自分だけではなくて、家族とか、命とかも危うい状況になる中で、李登輝先生を突き進めた原動力とは一体何だったのか？ということに関して聞きたいんですけれども。

李登輝：　私ね、この問題はね、実は忘れてはいけないのは、蒋経国総統はね、実は（政権）末期頃になるとね、彼はね、もう国民党の政府はね、台湾で将来やっていかなくてはならない。大陸に戻って行くという可能性がない、ということをわかっていた。その前にね、ある（米国籍台湾人の）作家がアメリカでね、蒋経国の伝記を書いたのがあってね、実をいうと、彼（蒋経国）にあまり良いアレではなかったんだ。その時にどうもね、（蒋経国の）特務機関がね、急にこの作家を殺したという事件（江南暗殺事件）があったのよ。で、彼がやらせたんじゃなくて、それを脇の人間がやったことに、彼は考え方を相当変えたんだな。彼はいろんなこ

とをあの時やった。第一に戒厳令の停止をやった、台湾で。

台湾というのは38年間戒厳令だったのよね。戒厳令は思ったよりは大変ですよ。もうあの戒厳令を38年間やったのを蒋経国がね、キャンセルしたんだな。新聞・雑誌はあの時、禁止されとった。あの、新聞紙の記事ってね、もう、新聞というのは自由じゃなかった。新聞は自由じゃない。選挙も、それから、党を作れなかった。それは彼はね、今の民進党の前身ね、うん、公正会。公の会。こういうのを、政党を作らせたのよ。彼はね、黙ってこれ、やらせたんですよ。あの「臨時条款[4)]」では、こんなことやれないのよ。で、彼はこのことをやったな。

彼がね、もう一つ非常に大切なことはあの、書いてあるでしょ？司馬遼太郎の本（『街道をゆく 40　台湾紀行』（朝日文庫））で。蒋経国はこういうことを言った。私は台湾人になると。蒋家からは将来、総統になることはない。蒋家はね、もう総統を継ぐことはない。ここで、中国的な「私（わたくし）」という考え方が切れちゃったわけだ。もう公の。彼は、李登輝にやらせると、そういう事はいっていない。でも、蒋家からは総統は継がないと。けど、中国では結局、歴代誰が総統になれば次は誰がなる、息子の誰がなる…こういう世襲制度だな。こんな考えは日本にもまだ残っている、ある程度ね。この世襲制度が、私に言わせると日本も変えなくちゃ本当の民主化ではないんだよ。日本の欠点はやはりここにある。そして、今の単一選区（小選挙区）の選挙は大体ああいうような仕組みを作り上げている。でこれを変えなくちゃいけないのよ、日本は。だからこのようなことがあるからね、私が総統になった時、私はね、秩序、手には鉄砲もなければ、つまり、軍隊の指揮もなければ、この軍隊というのは日本と違ってこの国民党の、党の軍隊だよ？彼は革命を起こした時のグループだよ。で、国家の軍隊じゃないのよ。で、こういうような状態に、私はそのグループではないし、私を囲む…。

羽生　：　政府内のシンパみたいなものですか。

李登輝：　そう、そうね。そういうものがないのよ、私。だからこういう私、いきなり蒋経国が亡くなったのよ。どうするかという問題なのよ。彼は1月13日、1988年の1月13日の午後3時頃に亡くなったのよ。私は8時に憲法に基づいて急に総統に就任したのよ。憲法を守って私は総統になった。私、明日からどうすべきかという問題。ね、急に総統になったから。

羽生　：　心構えは当然出来ていなかった？

李登輝：　そう、ここに問題がある。そうすると、蒋経国が今までいってきた、私は台湾人であると同時に公というものを忠実にする。そうすると、私はね、こういうような場合ね、私はどうすべきかだ。もちろん私心の中ではね、やっぱり考えてる。台湾はやはり台湾人の台湾の社会、台湾人のこの政治と民衆政治と、これをやらなくちゃいけない、と言ってはいけない。力がないのよ、何もない。だから私、亡くなった彼が、私は代理、代理、代理総統だからね。2年4カ月私が代理だから。これをどう上手くやるかで問題になる。代理だからね。私、彼が亡くなるって、それであの葬式やるまで13日間あるな、と。毎日毎朝7時頃、あの、あの、

彼のあの、礼拝、礼拝に行ってね、彼のあの…なんだ？あの…えー、あの、…何という？ほら、あの、位牌？

秘書　：　慰霊？慰霊ですか？

李登輝：　そう、慰霊にね、私ね、毎朝よ？あの、頭を下げに行く。すると人に、人、一般の人から見て、「李登輝はやっぱり、彼は黙って蒋経国のあの路線で、やっていくんだなあ」ってね。そしてその昼、暇あったら毎日この、あの元老連中を回ってね、取りあえず彼らに教えを請いに行くのよ。私どうすべきかな、何かご意見ありますか？って言ってね。そして私がさっき言っとった、その、何と言うかな？この…「謙虚」をね、この謙虚な気持ちであの、皆さんのご意見を聞きに行きます。ね、そういうようにしてこの連中達に、あの元老とか、この党の中にいる元老から、少し政治的な面について聞きに行くわけ。彼らを見ると、「やっぱり李登輝はね、信じられるんだなあ」と。そういうことを植えつけなくてはならない。2年何カ月そうしてね、私あの時やっぱりゆっくり考えて、今この政治形態をどう変えるかという問題が出てくる。で、こういう事をやりながら、謙虚にやりながら結局、冷静にこれをどういう形で変えていくべきかということを考える。考えてきた結果はね、あの時はね、「反抗大陸、反抗大陸」と、もう軍隊は強いこと言うからね、ということで、軍隊は私、総統になったから私はもう三軍の総統だというのを名前だけやってもね、まだ昔の、あの、国民党の軍隊だからね、そう簡単には行かないのよ。そういうような場合ね、どうするかなって。それで考えてきたのは、どうもね、ここらへんね、台湾を上手く政治的にね、あの、民主化するにはね、唯一の方法は国民党と共産党の戦争をね、その国民党と共産党の戦争をね、停止させる！それで、何が停止させるかというと、停止させるにはこの連中達がね、今まで「反抗大陸、反抗大陸」と叫んできたのをね、彼らに、「いや、もう反抗大陸やめましょう。そして、戦争するのをやめましょう」。そしてね、「国家統一委員会、国家統一しましょう」って（説得する）ことだよ。戦争やらないで国家統一、どうだ？その時に条件をいっぱい作るのよ。条件を作って統一しよう。統一、国家統一の条件を作っておく。そうすると、この条件を見てたら中々、統一出来ないのよ。分かる？ね、中国大陸は民主化になって自由化になって、国民の所得も平均になったらお話しましょうと、そういうことをいくら待っても出てこないでしょ？だけど一応、反抗大陸はしないで、国は統一というかたちで持っていきましょうと。そういうことを出来た時点だったらもう大体、全部は気持ちが今までと違うから、気持ちが作る。その時に、次どうするかって言うと結局、いわゆる「動員戡(かん)乱」[5)]と言うものを私はギブアップ（廃止）する。国民党と共産党のいわゆる闘争、戦争を停止させる、ね、この考え方、これで戦争の停止やると。やると、中国大陸に対してもね、もう戦争やりませんよとね、そんで、あんた方上手く中国大陸を統治していますけど、台湾は私の方で統治しております、と。そういう風に宣言するのだ。

そうすると後が問題ない。この戦争が終わる、無くなったということになると

一応、宣言したから、結局、「臨時条款」をね、落と（廃止）さなければならない。憲法、今までは憲法があったのよ、非常に民主的な憲法があった。この憲法が凍結されているのよ。その凍結された後で、この「臨時条款」というのを作った。これがきっかけで台湾は 38 年間…いや、28 年間（ママ。38 年間）戒厳令を敷いて、総統が死ぬまでやるよ、とか、万年国会というのが作られるような。議事が出来ないのは個々でやるのよ。この「臨時条款」を落とす必要がある。この「臨時条款」は私がやったんじゃない。国民大会というのがあってね、それで 600 人位のね、国民大会の代表がおってね、この連中達にお願いしなくちゃいけないのよ。でないと、この連中達がね、会議を開いてこの「臨時条款」を廃止するとやってくれなきゃ、私何もやれないから、だからお願いに回るのよ、600 人位の人間に。

羽生　：　全て説得して回ったんですか？

李登輝：　ああ、そうよ、もちろん。ところがそれじゃあ中々（うんと言ってくれない）。彼らは逆にね、あの、自分のパワーを延長したいとか、そういうことばかり考えているでしょ？ね、しょうがないからね、「退職金あげますから、辞めて下さい」。１人 500 万（元）、600 万（元）位ね、お金あげたのよ。

羽生　：　それで素直にリタイアして下さったんですか？

李登輝：　彼らはね、もう全部年だからね、もうお金あって家もあればね、安心出来るのよ。だからもう会議開いて、「臨時条款」を停止する。「臨時条款」を停止というのは、彼らがリタイアせざるを得ないでしょ？ね。リタイアするんだよ。これは、あの、「臨時条款」によっていわゆるマンネリ国会だから、このマンネリ国会を停止させなきゃいけないのよ。民主化をやらないといけないんですよ。そしたら彼ら、やってくれたのよ。やってくれたから、今までの古い憲法、このある程度民主化した憲法を普及、復活させるのよ。復活させると何が起こるかというと、誰、次の国民大会の立法委員（国会議員）の、この国会はね、選ばなくてはいけない。台湾で選ぶ、大陸から選ばないで。ここに、国会が、台湾に絡んで、人間が出てくるわけよ。出てきたらどうするかと言うと、この憲法は大陸の時に作った大陸向きの憲法だから、これを修正しなくちゃならない。ね、これは賭けでね、修正する。修正してね、今度どうするか。一つの条項を落とす。「総統は、国民大会によって選ばれる」という条項を落とさないといけない。だから、憲法の修正によって人民が総統を選挙する。

羽生　：　直接選挙を実施すると？

李登輝：　そう、（その条項を）置かないといけない。で、ここで、これが出来るとある程度政治的には民主化した形になるわけだ。そうすると次に体制を変えないといけない。何、どういう体制かって、今まで台湾は「台湾省」といっとった。中華民国台湾省。台湾省をなくすんだ。台湾省はない。台湾は一つの国なのよ。そういうことになるわけだ。

次にはね、今までの国民大会での、これは昔のボリシェビキのね、まあ、昔の

人民大会と同じだ、中国大陸の。これはいらないと。これも落とさないといけない。こういう古い憲法を一歩ずつ修正していく。で、これに結局あの、え一何と言う？結局、台湾に向いたような憲法にこれ、作り上げるから、名前、何と言ったかな？台湾だけの十何カ条の特別憲法がある…。

秘書　：　はい。憲法改正したやつですよね…。忘れました、はい。

李登輝：　こういうような形でね、結局あの、台湾人…台湾…結局この憲法も台湾の…。

秘書　：　台湾自由地区人民条約。

李登輝：　台湾自由地区の…名前は何だ？増加条文？

秘書　：　はい、そうです。

李登輝：　増加条文というのを作ったんだな。あの、今までの憲法はあの、使わないで、台湾で使うだけのこの憲法に、この増加した条文を作り上げて、台湾向けに作り上げたのよ。まあ、ここまでに結局 12 年かかったなぁ…。

羽生　：　12 年…。

李登輝：　こういうような形でね、今言ったようなね、その時に結局ね、中国からミサイル打たれたとかね、こんなの性急にやってきて、1995 年にアメリカを訪問するわけだなあ。これも大きな問題なんだ。国だからね、後には台湾と中国はね、国と国の関係、あるいは特別特殊な国の関係というところを最後に、これをやるわけ。すると、ところがね、この問題は、この特殊なのは何かというと、実は他の人はあまり分からないけど、この特殊というのは、台湾のこの今の、国の法的な地位というのはね、実をいうと台湾の法的地位はね、中々曖昧な態度に置かれている。台湾は国か？と。国みたいで国ではない。じゃあ何だ？分からない。これが結局、アメリカが作り上げた一つのケース。国際法的には今までなかった一つの形式なんだよ。これがゲネシスといってね。これは特殊な国と国の関係という国があるんだ。だから台湾は今のところは…。中国大陸は一所懸命いろんな、今までその国家分裂方法はならんとか、ね、「台湾は国家分裂したらいけない」とかいって、台湾は中国の意思通りだと。台湾は中国（戦後の中華人民共和国）の領土ではなかったんだよ。今まで、それで中国の部分はどこにあるか？そうでしょ？そこらへんによって、台湾の持つ法的な地位は、これから努力しなければいけない一つの問題ですよ。

連合国（ここでは国際連合のこと。英語名 The United Nations の直訳は「連合国」）はあの時（1971 年、中華民国の国連脱退を指す）、あの国際連合からもう離脱しているから、国際的な組織に入っているのはもう WTO しかないのよ。それは私があの、何年の時にこれ、国という名前には入れなかった。で、国という名前というのは、世界であまり認められていない。だから台湾は何かというと、「中華民国は台湾にあり」だよね。中華民国かどうかだよ、しょうがないから中華民国作ろうって、だから「台湾中華民国」だとこう言ってる。ね。まあこういうような形で台湾は非常に曖昧なわだかまりを抱えている。その点、日本にはね、台湾に対する態度がね、日本は曖昧なのね。

羽生　：　はい、そうですね。

藤井　：　うん、うん。

李登輝：　それを曖昧にしたのはね、マッカーサー司令部なのよね。これはアメリカのやったこと、でもアメリカは中国を承認せざるを得ない。ソ連との間における冷戦のために、中国大陸を認める必要がある。台湾と日本も同じよ、田中（角栄）内閣の時に。台湾との国交を断絶しちゃった。ね。で、ところがここらへんに矛盾点がいっぱいあるけどね、まあ、ここらへんのをどう処理してどうやっていくかで台湾の非常に努力しなくちゃいけないことなんだ。難しいのはここなんだ、ええ。

羽生　：　今の(馬英九)政権はどういう風に向き合っていますか？

李登輝：　今の政権はね、非常に中国寄りにね、寄っている。でも、ところが人民は非常に反対なんだな、これに。だから思い切って中国との間における問題をね、持ちかけようというのは非常に難しい。難しい理由は何かというと、台湾の人民が反対しているだけじゃなくて、台湾というのは、アメリカの台湾関連法の下に台湾が置いているわけである。ここが問題なのよ。いきなり台湾を中国が飲み込むというのは不可能な状態で、台湾関連法というのがあるのよ。そこらへんね、最近日本でもね、日本でもね、台湾関連法を作ろうという気が出てきている。

羽生　：　自民党を中心に。

李登輝：　うん、日本でもね、ここら辺が、「李登輝友の会」の総会はね、東京のね、このような形で今、努力しようかと掲げているのよ、ね。っていう台湾関連法っていうものを作ってね。

羽生　：　自民党の現政権での動きがあるのですか？

李登輝：　今ね、非常に重要な時期に来てるから。なぜかと言うと、国際的な状況は何かというと、あんた方も知っておかなければならない。アメリカと中国との間の中で、冷戦は近付いてきているぞ、という問題がある。この冷戦がいつどうなるかわからない。冷戦があってもね、誰、本当の実践ね、戦争があったらどうなるかという問題がある。これ(『アメリカ人の中国観』(文春新書))は誰か書いたかな。

秘書　：　井尻(秀憲)さん。

李登輝：　井尻は大抵、台湾関係のことを書いているが、この本の中だけではアメリカと中国の問題、非常に細かく書いているね。ね、ま、彼の考え方、私、ある程度同意しますよ。ね、さっき言ったGゼロ(『Gゼロ」後の世界』(イアン・ブレマー))という例のあの本でもハッキリ、今のこの状態は結局、アメリカの覇権がなくなって中国が飛び出してきた、と。中国がこういう風にアメリカにいった。「G2やろうか？」でも結局、中国が「あー私、貧乏だから私、やらない」と。それで「今の組織は嫌だ」とかなんとかね、この中に書いてますよ。なかなかね、そういうことをやらないのよね、なので、G2入りはしない、したくないのよ。私が言いたいことは、新興国があって、提供出来るリーダーシップは、アメリカ、いや、その同盟国が今持っているリーダーシップからは程遠いということです。それはい

くつか理由がありますと。取りあえず中国はね、今の組織ね、好まないんだよ。中国無比の社会主義的な考え方で、自分の利益のことしか考えないのよ。ね、だからこういうような所には、まず一つは、新興国は先進国に比べてはるかに貧しいとかね。中国は次の十年で国家としての GDP は世界一になるかも知れませんが、1 人あたりの所得を見るとまだまだ低いです。

だからね、そこで彼らが優勢に、こう、グローバルなものよりも、ドメスティックなもの、ね。グローバルな問題よりも、国内問題の処理が非常に難しい。まだ、新興国のいくつかは、世界の中で容認すべき政治システム、経済システムでは、先進国とは非常に違ってきている。彼ら（中国）は結局この民主主義の自由というものを、彼らは持ちたくないんだな。彼らはアメリカ、他の先進国と比べて内政干渉の方に向けやすい。尖閣列島の問題を持ち出してきたりする。こんなことしかやらない。本当に世界の秩序のためにやってくれているか？いやいや、ダメだよ。これは間違いないですね。

こういうような問題だから今の世界の情勢は、あなた方は将来はね結局、メディアの仕事やるからね、どうしてもね、世界のね、この行政の変化を知らないといけない。この世界の情勢の変化、その変化の中に日本はどうあるかという問題。日本はどうしてもね、これだけの経済力を持っている国としてはね。政治的にも、何かやらないといけない。ここら辺はね。今、台湾は、いわゆる政治的に…。ほら大体覚えてるでしょ。私、言うたやつ…。何故、いかにして蒋経国が亡くなった後、これをもってこられたかという問題ね。こういうような形ね。大体言うてることはわかるはずね。ここら辺はね指導者として自分で考えなくちゃいけない。私、それ出来るか。出来ないのか。困難の問題がどこにあるか。それをいかにして処理する。で、謙虚。

藤井　：　謙虚ですか？

李登輝：　まず謙虚を始める。私も「安倍さん、“謙虚” をやりなさい」とお願いしてます。あまり強くやったらね、あちこち打撃受けますよ。本当に日本のメディアは大変だからな。

秘書　：　総統、最後簡単に、あと 3 人の質問を。

李登輝：　もう 3 人言わせるよ。遅れても構わない。

秘書　：　はい、はい。

一同　：　（笑い声が上がる）

廣瀬　：　ありがとうございます。

4. 日台共栄のために

李登輝：　加藤さん。

加藤㈹：　李登輝先生が、クリスチャンというお話がでたんですが…。

秘書　：　（聞き取れなかったので）総統がクリスチャンですって。

李登輝：　あ、そうそうそう。

加藤(大)：　それで現在、中東などで宗教の違いによる紛争など様々な問題がありますが、宗教は李登輝さんの政治観にどんな影響を与えましたか。

李登輝：　宗教が私に対してどういう影響を与えたか？

加藤(大)：　はい。

李登輝：　影響、与えないよ。

加藤(大)：　与えないですか。

李登輝：　ええ。彼ら（紛争当事者）は宗教持ってないのよ。彼ら全員個人の利益しか考えてないよ、ね。この個人的な利益のために、この党がある限り、人民のことはそんなに彼らはね、あれ。だから国内的な問題は非常に大きいね。個々の。国内問題の処理は、今の中国にとって一番の大きい問題だ。ね。私、ここに皆さんにあげるために書いてるから…。

秘書　：　（問い直す）宗教が総統に政治にどういう影響を与えましたか。

李登輝：　与えてない。私は私だ。台湾の考え方。台湾は、民衆。台湾の民衆的な政治をやるべきだった。ね。これは、台湾。だからここに…あんたあれ？クリスチャン？

加藤(大)：　いや…無宗教です。

李登輝：　結局、バイブルの中のアレ。「出エジプト記」。台湾は長いこの困難の中から、400 年の歴史を持っていながら、台湾人は、自分達の国の主人になったことはない。外来政権によってばかり治められてた。これから台湾になる。台湾の、いわゆるさっき言った台湾の政治。民衆が。いわゆる本能なんだよ。台湾の本能を中心にやっていくべきだ。そういう考え方ですよね。はい。お次。

加藤(摩)：　名刺をお渡ししてもよろしいでしょうか。

李登輝：　どうぞ。

加藤(摩)：　加藤摩周と申します。自分は日本の大学で多文化共生の実現というための活動をしておりまして、宗教や国や言葉の壁を越えて人が人と向き合えるような、そういう社会を作って行けたらいいなという活動をしています。日本と台湾は非常に友好的な関係なんですけど、日本の学生も台湾の学生もまだまだ友好化って言うところについて意識出来てないと思うので、これからの学生たちが教育されていくべきところで具体的に将来、日本と台湾もっと友好化するためには何をやったら良いかということをちょっとお伺いして良いですか。

李登輝：　そうね。台湾と日本と将来の問題は何が主になっていくかという問題ね。民主主義台湾の世代に期待する者、これから日本と台湾はどうなっていくかと。日本統治時代を知る、日本時代の人。私みたいに日本語をしゃべるっていう人間はだんだん少なくなってきた。もうおそらく 70、80 歳以上。例えば昔ね、「台湾高座会」というものがあってね。昔、台湾の人は、日本のあの時の戦闘機ね。戦闘機を海軍の戦闘機を作るために神奈川県（高座郡）の工場、海軍工場に台湾から 8,400 人の少年工が行ってた。今、この人たち 1,000 人しか残ってない。この人たちは日本でいろいろなことやってきた。こういうことから言うと日本語世代というこ

の台湾人というのはもうなくなっていく。

ところがね。この第 2 の世代。私たちの次の世代（大戦直後の世代）は、まったくの中国（式）教育（中国統一を目指す国民党政府の教育）だ。本当にね、リーダーとしての人間は私、中々見つからない。今の総統とか（もそう）。将来、本当にやっていけるのは、次の世代だと私は思う。いわゆる私が総統の時に、今まで大陸中心の中国主義の教育を出し（止め）てね。民主主義台湾という、台湾の歴史を教えはじめた。台湾の歴史、教えてなかったのよ。皆さんもおそらく日本の歴史、教えられてない。可哀そうだよ。それ、日本の良いところ悪いところ、分からない。これ知るべき。で、台湾とどうあるべきか、台湾人とは何か、アイデンティティーの問題を考えなければいけない。これらのためには、日本と友好のために大いに発展させてくれるのは、次の世代の青年たちだと思います。

私この中にも書いてるのは、ある大学生が私に送ってくれた手紙ね。皆さん読んで下さい。生きるために我々何をすべきか。いろんなことを書いてくれてた。この手紙、読んだら、今の日本の青年たちに大いに期待したいのは、こういう新しいこの考え方。これ持っていると私は思う。台湾と日本との間における関係というのは、やはりね、現実的な面としてはね、いわゆるそのビジネスの面から、政治的な面に関して台湾にある程度のね、了解を日本は持つようにならないといけない。例えばさっき言ったような、漁業協定、早く実現すれば、台湾の漁民は大勢、ものすごく喜ぶよ。全然やらないね、日本[6)]。12 月に民進党の連中たちは第 8 回の会議開いて、判を押すと、一緒にやると、そういうことを日本は思い切ってね（やってほしい）。中国に、いわゆる気兼ねばかりしてね、台湾との間におけるこの問題。国際的にこれやっぱりやっていかなくちゃいけない。これ、非常に大切だね。こういうような史実の面において、例えば台湾関係法を作る。最近初めてね、台湾世紀（暦）というのが出来たのよ。今まですっと中国世紀だよ。で、国籍にしてもいわゆる戸籍にしても、台湾、台湾省、中国台湾省と言ってた。中国人だと、そう言ってた。最近初めて台湾世紀、台湾人ということに切り替えた。司法（的）にどうすべきかと。漁業問題、あるいは農業問題、台湾でどう上手くやっていくかと。これやらなくちゃならないんだ、今。台湾から日本にものすごくいろんなものを出さ（輸出し）なくちゃいけない。日本はマンゴー1 個ね、2000 円するでしょ。あんなに高いマンゴー、宮崎から出してるマンゴー。台湾からどんどん出せばいいんだよ。1 個 100 円ぐらいで食べられようにしてあげるべきだね。ここら辺にはね、もちろん日本のね。日本に出来ないもの、あるいは日本とはあまり競争しない程度にね、こういうこの、商関係を改善していくとかね。日本人は、中国大陸行くといじめられるから、台湾に来てやって台湾から物を売っていったらいい。こういうようなことがね、だんだんとそういう形にならざるを得ない。

こういうところね、日本的（やり方）でね。今の若い人は日本の精神なんか知らないのよ。ここら辺をもう少し固めていく。考えをね、広めていく、敏感に感

じる。政府の後押しを待ってやる、こまごまとやったら困る。まあアメリカというのは、非常に曖昧な国で。私、台湾関係法というのは、曖昧な法律、あるかないかというくらい。これを変えていく必要がある。ところがアメリカは、国家の利益のために、いろんな…良くなったり悪くなったりする。利益があるときには恩を売るが、利益が悪い時は知らない。日本に対しても同じです。今日本はアメリカに、「アジアにおける大きな問題は日本が責任とるから、日本にやらせろ。心配するな、あんたがた、今の経済も良くないしね、政治も難しいしね、日本でやるから、安心して日本に任せろ」と国家間における関係を固めて下さい。そして、今までの日本に対するいわゆる戦争に負けたからといった、不平等的な面。だんだん落としていったらどうか、こういう事をやらないと、今。

台湾に関しては、もう少し今までの関係もあったという形で、これ固めていかなくちゃいけない。でないと今の台湾の政府、何やるか分からない。この連中たち。中国と一所懸命関係結んで…結局あの彼らは中国（式）教育しか受けてないから、分からないのよ。日本の事知らないのよ。今の世代になると、まあ良くなってきている。よく分かってきている。まあここらへんでこの関係を密接にする。非常に台湾、日本からのね、旅行が非常に増えた。一昨年の地震（東日本大震災）の後にね、大勢人間増えて、これは非常にね、いわゆる両国との関係をね、固めなくちゃいけない。この中にね（本を叩く）結局、50 年間における日本と台湾との関係ね。日本と台湾の同胞たちへ。こういう問題、私、書いてるの。台湾人というのはね、日本に対してはやはり、妙に良い感じを持っている。おそらく世界で一番良いでしょ。例のこの、一番良いのは、私、この間書いたな。結局あの、司馬遼太郎さんが書いた、この台湾に関するこの感じね。いわゆるその名残ね。こういうような気持ちというのは、まだ旧台湾人が結局、日本に対して、非常に大きな…。私何も言ってないよ。応援しろ、元気を出せ言っているだけで、十分自発的に…自発的にやっているんだ。これ台湾人というのは日本に対する感じは非常に違うということだね。こういうこと知らないといけない。次は。

杉山　：　はい。杉山萌奈と申します。よろしくお願いします。今のお話にもあったのですが、台湾の方が、日本に対してすごく親日的だとずっと聞いていて、その思いで台湾に来たんですけど、被災地の言葉をこう台湾の人に伝えた時に台湾の人が、胸を痛めて心配だという言葉をもらって、すごく嬉しかったんです。台湾と日本の関係がこう…自分で実感出来て。でも日本の政治がいろんな問題を抱えていて、そういう中で私たちが今後、未来を築いていかなければいけないのに、今後どうしたらいいんだろうという。私が、私たちが今後、日本の未来を築いていかなければいけないので、自分自身をこうどうしたら良いのかっていうことを是非、李登輝先生にお伺いしたいのですが…。

秘書　：　（言い換えて）あのこういう若い学生さんたちが、将来の日本を作って行くときにどんな心構えが必要ですか。総統のアドバイスを頂きたいそうです。

李登輝：　台湾は、日本の唯一のね、良い友達である、という考え方を持ってつき合って

いく。で、台湾とのいろんな問題に対しては、ある程度のね…。これはね個人的には出来てもね中々、日本の政府では今の状態ではあまり出来やしない。この問題全部がこういう気持ちになれば、克服出来るだろうと思います。

今の日本の政府はね、まだ戦後の考え方から抜け出してはいない。まあ今回の安倍内閣による日本のね、（台湾を）特視したこの考え方、この方向に日本は持っていけば、おそらく台湾と日本の関係はもうすぐ、もう少しね、強い関係が出来るんじゃないか、というが私の見方ですよね。まあここら辺ではね、まあ政治が大きく影響しているけれど、民間の方では、相変わらず歓迎は良いんですよね。

羽生　：　李登輝先生からご覧になって先程、いや若い人たちこれから日台の間で結びつきを強めれば良くなっていくんじゃないかと、というお話がありましたけれど、台湾では若い人たちに日本文化に親しむブームが近年あるのと比べて、日本ではまだまだ日台の歴史について知らない人が多く、現代史でもほとんど学ぶことがありません。李登輝先生は今の日本の若者達、例えばこういう風に台湾のことを学びに李登輝先生を訪ねてくるのを、どう思われますか。

李登輝：　台湾の方がかえって勉強してない。あんたがたの方が勉強している。私、本当よ。もちろん今、いろんな大学行ってね、いろんな講演やっていますけどね、あんたがたこうやって日本からわざわざね、李登輝に会いに来る。これは非常にね、大変に、親善関係の上においてもね、こういうところではね、まあまあ私も一所懸命努力してやりますよ。92 歳だけど、まだ何年間は頑張ってね。日本と台湾の関係をもう少し固めていきたいね。それはね、政治の面からも人民の間における関係もやらなくちゃいけない。そうやって今大抵、今日本にはね 48 県（ママ。47 都道府県）の中に 27、26 県ね、「李登輝友の会」の支部会があってね、事務方がね、一所懸命そこらへんね、私を通して日本と台湾の関係を固めて行ってるわけですよ。

まあここら辺はお互いに努力し合うべきだと思いますよ。あんたがた今の日本の若い人。私、高く評価してますよ。日本の医師の青年から受け取った手紙。これは私が、ある計画をした時に、日本の若い人を招待しようと思った。その時にね、彼が私に書いてくれた手紙。私とても感激しましたよ。それから東大と慶應の学生が来て帰って行ったのね。そしたらね、地震にぶつかって、私に手紙書いて来たんだ。私これね、いわゆる日本の雑誌に…なんて雑誌だったっけ。ちょっとした面白い雑誌ですよ。あの雑誌の中に私に何か書いてくれた。地震があった時、お手紙貰ったんだよ。その雑誌ではね、なんていったかな。精神的な面で、いろんなことを言う雑誌で、私に何か書いてくれと（頼まれて）、大震災のことで私、たくさん手紙書いたから。

まず日本人に言いたいのは、まず、生きるためにどうするか！この災害地における人たちにどうあるべきか、日本人はどうあるべきか、その一大学生の手紙をそのまま載せた。まあここらへんは私、良いんじゃないかと思います。そこらへんにね、よく、最近の日本の若い者はダメだと言うひとはおりますけども、私は

そんな若い人を知りません。

羽生　：　メディアなどでもよくそういわれることが多いので、日本の若者にも自分たちは駄目なんじゃないかと気にする者もいます。

李登輝：　そういうことない。これ読めばいいね。ただね、こういう日本の若い人々がこういう活動する。いわゆる活躍許される範囲があまりないからそういう気持ちになってきている。日本の若い人々は考え方がね私、良いなあと思いますよ。頑張って下さい。まあ今日はこのような形で皆さんにたくさんの事を言いましたけどね。やっぱり将来のリーダーシップとしてね、やって行かなくちゃいけない。

秘書　：　これは皆さんへ。（時間になったので、秘書がお土産を出される）

李登輝：　これは栞です。皆さんへ一人一個ずつ、先生にね、これはね「誠実自然」、これは日本精神だよ。「誠実自然」ですよ。

羽生　：　ありがとうございます。

李登輝：　これはね、嘘をつかない自然の生活。日本人。

羽生　：　ゼミ室に飾っておきます。では、これを中心に記念写真を撮らせて下さい。

藤井　：　（記念撮影後に）最後にもう一つだけお聞きしたいのですけど、こういうご活動（学生との対面取材）を今でも続けている理由っていうのを教えて下さい。

李登輝：　日本時代のもの、民のものを守らないと危ないんですよ。中国ばかりが手を出して、どうしても台湾というのは…（聞こえ辛い）台湾は、日本の生命線ね、日本と台湾はこれから手を固めていかなければね。戦争に負けたからといって、怖じけたらダメよ。

一同　：ありがとうございました。

おわりに

筆者が学生を伴った李登輝元総統への表敬訪問を企図したのは、2011 年 3 月の東日本大震災の後で世界最大の 200 億円にも上る民間の義援金が台湾から寄せられたことや、日本を含む東アジアの未来を左右する隣国であるにもかかわらず、台湾についてほとんど知識も関心もない学生が多いことに気づいたからであった。本稿中にもあるように、李元総統は政界引退後、各地で数多くの講演を行っており、特に学生たちとの対話を大切にされていることから、表敬訪問の交渉を経て、この対面取材が実現した。

李元総統は、台湾人に台湾人としてのアイデンティティーを目覚めさせるための民主化を大きく推進させた国父であった。現在では台湾の 83.2%が、自分は台湾人である意識していると言う[7]。台湾について学んで行くなかで、日本人の立場であっても、政治や歴史について考えること、語ること、そして日本人とは何か、民主主義とは何か、という問いから免れ得ないことに気づく。学生たちは、台湾への海外取材研修の前に日台の関係史を学び、同時に日本の近現代史をも学び、そして現地での李元総統との対面取材や様々な交流を経て、日台そして世界の複雑な「今」を理解するきっかけを掴(つか)んだようである。

対面取材記録を改めて読み返すと、率直に日本の若者たちに語られ、李元総統の座右の

銘である「誠実自然」が体現されていることにも気づかされる。この対面取材から 7 年半後の 2020 年 7 月 30 日に李元総統は亡くなられた。生前にこのような対面取材の要請を受諾され、時間を惜しまずに日本の学生たちに向き合って頂いたことに、改めて深い感謝の念を捧(ささ)げ、ご冥福を祈りたい。

註

1) 東海大学・学生取材班（羽生浩一ゼミナール履修生）のメンバー：藤井宏和（2 年生）、加藤摩周（2 年生）、杉山萌奈（2 年生）、加藤大地（2 年生）、西村百合恵（3 年生）、村山裕紀（4 年生）廣瀬亜美（5 年生）。本文中の表記では、加藤摩周を加藤(摩)、加藤大地を加藤(大)と表記する。いずれも 2013 年 2 月時点での学年。
2) 公表の許可は対面取材時に得られていたが、これまではゼミナールの「海外取材研修報告書」の中の、学生の現地取材レポート作成用の素材としての利用に留めていた。
3) 「オバマ二期目の“標的”となる中国」（古森義久,『VOICE』2013 年 1 月号所収, PHP 研究所）
4) 「動員戡乱時期臨時条款」のこと。かつて中華民国憲法にその一部をなす「臨時」の修正条項として追加された規定。台湾では 1949 年から 1991 年まで世界的に異例なほど長期にわたって存在した。
5) 「動員戡乱時期臨時条款」。国民党と共産党の内戦勃発時に、総動員体制を敷くための臨時条款。1948 年 5 月 10 日施行、李登輝政権下の 1991 年 5 月 1 日廃止。
6) この対面取材後、2013 年 4 月 10 日に、第 2 次安倍内閣は台湾と沖縄県の尖閣諸島（台湾名は釣魚台）周辺での漁業権をめぐる取り決め（協定）に調印をした。
7) 2020 年 2 月 24 日に発表された台湾民意基金會による世論調査の結果。

廣瀬　西村　杉山　藤井　羽生　李元総統　村山　加藤（摩）加藤（大）
（李元総統右隣の学生が手に持つ額には、ご自筆の“誠実自然”が揮毫されている）

執務室隣の応接室での対面取材は予定の１時間を超え、２時間に及んだ